石橋湛山「一切を棄つるの覚悟　太平洋会議に対する我が態度」

大正一〇年七月二三日号「社説」

　昨日までも、今日までも、実際政治問題にあらずとかいうて、尾崎氏等一部少数の識者を除き、在朝在野の我が政治家に振り向きもせられなんだ軍備縮少会議が、ついに公然米国から提議せられた[[1]](#footnote-1)。おまけに、太平洋および極東問題もこの会議において討議せらるべしという。政府も国民も愕然色を失い、なす処を知らざるの観がある。いわぬ事ではなかった。吾輩は、欧州戦争中から、必ずこの事あるべきを繰り返して戒告し、政府に国民に、その政策を改むべきを勧めて来た。しかるにこれを聴かず、事態を今日に推し詰めさせて、周章狼狽す、笑止というも愚かである。もし吾輩にして日本国に関係なき局外者であるならば「を見ろ」といいたい処である。吾輩はそれほど、我が国の近状を歯がゆく、なげかわしく思っておる。愚痴に等しいとは知りながら。つい痛憤の言葉が出る。

　我が国の総ての禍根は、しばしば述ぶるが如く、小欲に囚れていることだ、志の小さいことだ。吾輩は今の世界において独り日本に、欲ながれとは註文せぬ。人汝の右の頬を打たぱ、また他の頬をも廻して、これに向けよとはいわぬ。否、古来の皮相なる観察者によって、無欲を説けりと誤解せられた幾多の大思想家も実は決して無欲を説いたのではない。彼らはただ大欲を説いたのだ、大欲を満すがために、小欲を棄てよと教えたのだ。さればこそ仏者の「空」は「無」にあらず、無量の性功徳を円満具足するの相を指すなりといわるるのだ。しかるに我が国民には、その大欲がない。朝鮮や、台湾、支那。満州、またはシベリヤ、樺太等の、少しばかりの土地や、財産に目をくれて、その保護やら取り込みに汲々としておる。従って積極的に、世界大に、策動するの余裕がない。卑近の例を以ていえば王より飛車を可愛がるヘボ将棋だ。結果は、せっかく逃げ廻った飛車も取らるれば、王も雪隠詰めに会う。いわゆる太平洋および極東会議は、まさにこの状況に我が国の落ちんとする形勢を現わしたものである。

　過去の繰言は詮なき業の如きも、しかし吾輩は、この際の対策を樹立するがためには――而して吾輩は、後に述ぶる如く、遅れたりといえども、まだこの形勢挽回の策ありと信ずる者である――十分に過去の過ちを吟味して置く必要があると思う。昔を今にすることが出来るならば、吾輩は、せめてこの春、尾崎氏が軍備縮少問題を提げて起った時、これを議会が取り上げて、我が国から進んでこの会議の招集を。英米に提議することにしたかった。総て戦いは守ったのでは負けだ。進んで打って出でてこそ、我に有利な時と、地形と、戦闘の形式とが選択出来る。今回の会議にてもその通り、我からこれを提議するなら、自分の好きな場所、時、および問題の範囲等を選み得た。今さら問題の範囲について、米国に照会を発し、とかくの批評を世界から受くるが如きぶざまを演ずる要はなかった。また我が或る新聞は、事極東に関するにおいてはその会議の開催地は当然東京たるべく、またその用語は日本語または支那語たるべきものなりと論じた。そうあったら、我が国にとっては、どれほど便利であったか知れぬ。而してこれもまた、吾輩の説ける如く、我が国が主動者となって、この会議を開いたなら、随分実現し得たことであった。自分の方はこの会議の開催について、何の肝入りもせず、他人が心配してこれを催さんとすれば、とやかくと自分の都合をいう。そんな事は、少しでも人間の儀礼を知る者のなし得ない処である。英米から発動し来たらぬ限り、実際政治問題にあらずとして、他人の事の如く澄ましていた日本は、今さらどうすることも出来ぬ。ただ彼のいうままに、会議に列するか、あるいはこれを拒絶するか、この二つあるのみである。しかしながら我が国民の一人でも、果してこの会議に列することを拒絶し得べしと考うる者があろうか。或る新聞には、某閣僚談として屈辱的の会議なら、政府は出席を拒絶するとか書いておるが、それは心にもない、付け元気というものだ。裏面の魂胆は、世人のいう如く果して日本いじめの会議であるにせよ、表面の旗は、軍備縮少であり、太平洋の平和である。この会議に列することを拒む日本が、道徳的に、全く世界に立つ能わざる窮状に陥るは――従って世界全体を向うに廻して戦うの大民力がない限り政治的に破滅のほかなきは、小学校の生徒にもわかろう。されば米国の輿論も、たかをくくり、日本が問題の範囲の何のとぐずついても、結局賛成して来ることは、わかっておるというておる。どんなに、たかをくくられても仕方がない。実際、その通りに相違ないのである。身を棄ててこそ、浮む瀬もあれ、会議の主動者たる位地を彼に奪われた今は、ただ文句なしに、そこに飛び込み、浮む瀬を見出すよりほかはない。吾輩は、この点においてまた、我が政府が思い切り悪くも、而して結局米国の輿論の先見せる如く何の役にも立たぬ躊躇を示したことを遺憾に思う。而してこれを当然の措置であった如く承認する我が輿論の何ぞ低劣なる。彼らには、まだ、何もかも棄てて掛れば、奪われる物はないということに気づかぬのだ。

　しかり、何もかも棄てて掛るのだ。これが一番の、而して唯一の道である。しかし今の我が政府や、国民の考え方では、この道は取れそうにもない。その結果はどうなるか、わかっておる。対支借款団交渉の際の満蒙除外運動の結末が、それだ。我が大使は、しきりに、その小欲の目標物を維持しようと努めるだろう。しかし結局は維持し得ない。而して日本は帝国主義だ、我利我利だという悪名だけが残る。満蒙除外運動の結末がそれだった[[2]](#footnote-2)。今度の会議の結末叭それなること明白だ。されば今の我が政府や国民の考え方で進んだのでは、どこまで行っても勝味はない、失敗に失敗を重ねるだけだ。

　これに反してもし我が政府と国民に、何もかも棄てて掛るの覚悟、小欲を去って、大欲に就くの聡明があったならば、吾輩はまず第一に、我が国から進んで軍備縮少会議を提議し得たはずだったと思う。何となれば軍備縮少なることは、問題として、別段に大した智恵もいらぬ、至極簡単なものである。あるいは縮少の方法に面倒があるという説もあったが、これも、この頃、政府筋の発表によれば、とっくにいくつかの具体案が我が政府には出来ていたのであるというではないか。しからば何を狐疑して、軍備縮少は実際政治問題でないなどというていたか。曰く、例の小欲である。この小欲を遂げようとの心があるから、自ら臆して軍備縮少などとはいい出せない。これをいい出したら、自己の小欲を遂ぐるに障碍が起るべしと思った。なるべくならこんな問題は起さず、貧乏ながらに軍艦を作り、陸兵を養って、思うが如く小欲の満足を得たいと願った。けだし彼らは米国といえども、我が尾崎に似た一、二の連中が軍備縮少などと騒ぐに過ぎずして、いわゆる実際政治問題には、にわかになし得まじと考えていたのであろう。それを我から持ち出して、自縄自縛に陥るには及ばぬと思っていた。これ、皆小欲に眼をくらまされた結果である。第二に、仮りに会議の主動者には我が国際的位地低くして、成り得なんだとしても、もし政府と国民に、総てを棄てて掛るの覚悟があるならば、会議そのものは、必ず我に有利に導き得るに相違ない。例えば満州を棄てる、山東を棄てる、その他支那が我が国から受けつつありと考うる一切の圧迫を棄てる、その結果はどうなるか、また例えば朝鮮に、台湾に自由を許す、その結果はどうなるか。英国にせよ、米国にせよ、非常の苦境に陥るだろう。何となれば彼らは日本にのみかくの如き自由主義を採られては、世界におけるその道徳的位地を保つを得ぬに至るからである。その時には、支那を始め、世界の小弱国は一斉に我が国に向って信頼の頭を下ぐるであろう。インド、エジプト、ペルシャ、ハイチ、その他の列強属領地は、一斉に、日本の台湾・朝鮮に自由を許した如く、我にもまた自由を許せと騒ぎ立つだろう。これ実に我が国の位地を九地の底より九天の上に昇せ、英米その他をこの反対の位地に置くものではないか。我が国にして、一たびこの覚悟を以て会議に臨まば、思うに英米は、まあ少し待ってくれと、我が国に懇願するであろう。ここに即ち「身を棄ててこそ」の面白味がある。遅しといえども、今にしてこの覚悟をすれば、我が国は救わるる。しかも、こがその唯一の道である。しかしながらこの唯一の道は、同時に、我が国際的位地をば、従来の守勢から一転して攻勢に出でしむるの道である。

　以上の吾輩の説に対して、あるいは空想呼ばわりをする人があるかも知れぬ。小欲に囚わるること深き者には、必ずさようの疑念が起るに相違ない。朝鮮・台湾・満州を棄てる、支那から手を引く、樺太も、シベリヤもいらない。そんな事で、どうして日本は生きて行けるかと。キリスト曰く、「何を食い、何を飲み、何を着んとて思い煩うなかれ、汝らまず神の国とその義とを求めよ、しからばこれらのものは皆、汝らに加えらるべし」と。しかしかくいうただけでは納得し得ぬ人々のために、吾輩は更に次号に。決して思い煩う必要なきことを、具体的に述ぶるであろう。

1. 一九二一（大正一〇）年七月一一日、アメリカ政府は、日・英・仏・伊に対し、軍備制限および太平洋極東問題討議のため、ワシントン会議開催を非公式に提議し、日本は七月二六日参加を回答 [↑](#footnote-ref-1)
2. 一九一八年（大正七）七月、アメリカは日・英・仏に対し、四国合同の対中借款団の組織を提議（新四国借款団）。日本は満蒙を除外するよう要求したが、一九二〇年五月一五日調印。 [↑](#footnote-ref-2)